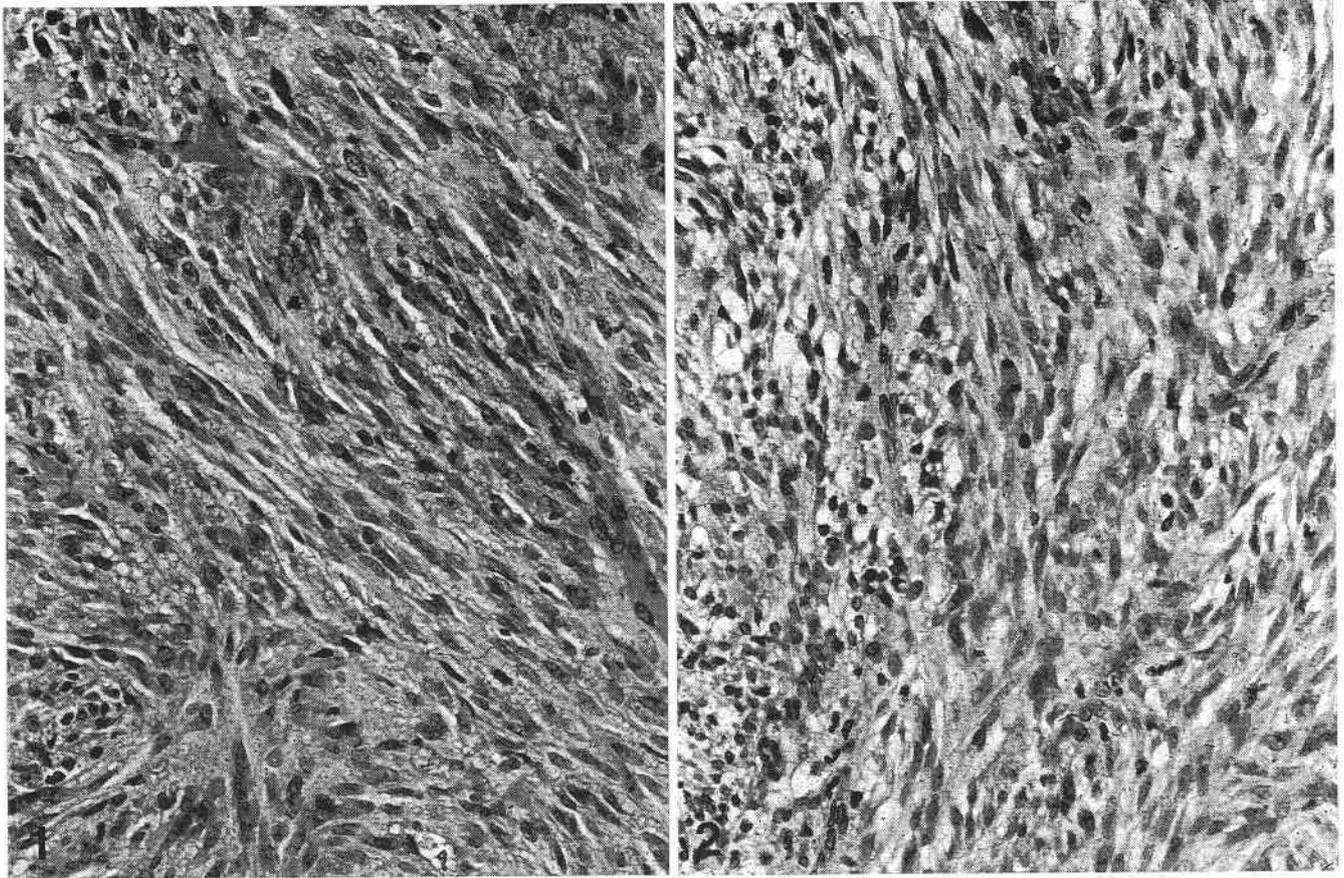


## 犬の眼内腫瘍

日本大学生物資源科学部獣医病理学研究室出題 第39回獣医病理研修会標本 No. 750



動物：犬，シェットランドシープドッグ，雄，9歳，  
体重 22.5 kg。

臨床的事項：右眼の紅潮により本学動物病院に来院した。罹患眼の直接対光反射はほとんど認められず，散瞳状態で，超音波検査で硝子体から網膜にかけて境界明瞭な直径約 1 mm の円形の mass を確認した。MRI 検査により眼底に接する円形の細胞集積が認められ，腫瘍が疑われたため飼い主の了解のもとと眼球摘出術を行った。

肉眼的所見：腫瘍は球状で白色，脆く，眼底の網膜に付着していた。

組織学的所見：腫瘍は紡錘形細胞の粗密構造を示す増殖から成り，密な部位では暗調な核を有する多数の核分裂像が認められた（写真 1，HE 染色）。粗な部位では間質は粘液状から脂肪空胞様を呈した。なお，フォンタナ・マッソン染色で腫瘍細胞内にメラニンは認められなかった。

免疫組織化学的所見：抗ビメンチン染色および抗 S100 蛋白染色に対し，多数の紡錘形細胞が陽性を

示した（写真 2，抗 S100 蛋白）。抗デスミン染色および抗アクチン平滑筋染色に対しては陰性であった。

電子顕微鏡的所見：腫瘍細胞は類円形からくびれた核を有し，細胞質内には多数のミトコンドリアおよび遊離リボゾームがみられ，さらに発達の良い細胞質突起や不連続な基底板および接着斑が認められた。

診断：悪性神経鞘腫（malignant schwannoma）。

犬の眼球後部原発の腫瘍としては，黒色腫，奇形様髄上皮腫，網膜芽細胞腫，神経節膠腫などが報告されているが，悪性神経鞘腫の報告はない。本例の発生母地としては脈絡膜の毛様神経の神経鞘が考えられた。